



図1. ダイズの出芽時期とキジバトによる被害株率 (1982年, 農研センター圃場; 松岡・中村 (1987) より改変して転載).

な意味を持つ。こうした追い払い法の効果は、畑の餌量の比率によって決まるからである。

3. 鳥害研究会での活動

鳥害研究室には、全国からたくさんの問い合わせの電話がかかってくる。その半分は、農作物の鳥害に関してのものであるが、残りは航空会社 (Bird Strike)、電力会社、一般の方からのものなどである。これらの中には、新たな種による新たな被害を報じるものもあって、貴重な情報源であっ

た。そこで、1987年に全国の鳥害研究の関係者に呼びかけて、鳥害研究会 (後に、応用鳥学研究会に改称) を設立して「鳥害研究会ニュース」 (後に、「応用鳥学ニュース」) を発行した (研究会は、現在休眠中)。

また、日本鳥学会大会その他において、小集会を開催し、「鳥と人間生活との係わり」 (1991年)、「カラスシンポジウム: カラス、人とは一緒に住めないの?」 (1992年)、「各種の鳥害と対策」 (1993年) などの話題を取り上げて、講演と討論を行ってきた。これらの活動は、わが国の鳥害の現状の認識を深め、応用鳥学研究の道筋を示すために、いくばくかの役割を果たしたと思う。

引用文献

- 中村和雄・松岡 茂 (1981-82) 農作物の鳥害防止への道 (1)~(6). 農業技術 36-37.
 松岡 茂・中村和雄 (1987) ダイズのハト害の季節変動とその要因. 日鳥学誌 36: 55-64.

鳥ゼミ (東京) の 23 年

上田恵介 (立教大学理学部)

鳥ゼミがはじまって今年で23年になる。回数もこの4月で211回。よく続いてきたなと思う。私が立教大学に職を得て、大阪から東京にやってきたとき、東大秩父演習林 (当時) の石田健さんと、関東のあちこちで鳥を研究している人たちを集めて研究会をしようという話がまとまった。

場所は立教大学の旧12号館。私が赴任したときはまだ一般教育部 (教養課程) があって、私も含めて一般教育部の教員の研究室は旧12号館に集まっていた。この建物は、大正時代に建てられたビルディングで、あの関東大震災をくぐり抜けたというとても古色騒然たる頑丈な建物であった。1階は当時、立教中学校の校舎として使われていて、その2階の会議室がゼミの場所だった。時々、東大 (一度は目黒の自然教育園) に会場を移して行うことはあったものの、ほとんど立教大学を会場に開催してきた。そして二次会はいつも池袋駅西口の中華 (台湾) 料理店が定番だった。

はじめ、ゼミは輪読会から始まった。石田さんの提案で Grant 夫妻のガラパゴスフィンチの個体

群動態に関する本を、ゼミの参加者で分担して読み切った。『フィンチの嘴』もまだ訳が出ていなかった頃のことである。

鳥ゼミをはじめから1993年くらいまでは、一部にunix機やパソコンでメールを使えるメンバーはいたものの、メールはほとんど使われていなかった。だから鳥ゼミの案内はほとんど郵送で、一部はファックスで送っていた。

12月は忘年会である。鳥ゼミの忘年会は、その1年に、メンバーが国内、国際、さまざまな学会で発表したりサイクルポスターを貼って、その前でワインやビールを飲みつつ、じっくり議論するという趣向であった。おつまみや料理も各自が持ち寄るポトラック形式で、気楽な雰囲気 (お金も安い) の会であった。このポトラック形式は最近では定例ゼミにも定着し、毎回、ゼミの後は、皆が持ち寄ったワインや自家製ビールや、おいしい手作り料理で、懇親会が盛り上がっている。

鳥ゼミでは海外からの研究者を招いて話題提供をお願いすることもある。東大の樋口広芳さんの

研究室や国立科学博物館を訪れた海外の研究者にも来て頂いて話をしてもらっている。結果的に、年に1人くらいは海外の研究者による研究紹介が行われている。海外科研での共同研究者であるオーストラリアノーザンテリトリー大学のNoskeさん、ソウル国立大学のJaeさん、タイのマヒドール大学のPilaiさん、ヘルシンキ大学のフクロウ研究者Saurola博士、オーストラリアの橋川次郎さんが他の用事で来日したときにお呼びして話してもらったり、イスラエルのZahaviさんにも話してもらったことがあった。

ときにはオオヨシキリやツバメをテーマにミニシンポジウムを組んだこともある。卒論・修論計画の発表会をしたり、鳥学会や生態学会の前には、発表練習をかねて、鳥ゼミを行ったこともあった。京都の須川さんの紹介で、当時、同志社高校に通っていた平田和彦君（現北大水産学部）が来てヒメアマツバメとコシアカツバメの発表をしたこ

ともあった。

学位を取った若手には、ドクター論文の内容を話してもらった。立教で学位を取った人の場合は、学位論文公聴会を鳥ゼミとかねておこない、そのあとで「ドクター論文の苦労話を聞く会」と懇親会（ごくろうさん会）が定番だった。

現在、世話人には石田さんのほか、濱尾章二さん、藤田剛さん、西海功さん、植田睦之さんが加わり、鳥学会ではあまりつながりのない、たとえば港湾空港技術研究所で干潟のバイオフィルムを研究している人を呼んだり、各地のNPOで鳥や自然の保護に取り組んでいる人を呼んだり、鳥ゼミのテーマは鳥に関わるあらゆる分野に広がっている。

さてここまでなんとかじたばたとやってきた鳥ゼミだが、もう23年か、もう211回かと思うとき、よく続けてきたなと思うし、続けてきたことの意義は大きいなと思う。